

美術はどこから来て、どこに向かうのか

Laïcité et Art français: lumières de la foi et de la raison

ライシテからみるフランス美術

信仰の光と理性の光

2025.10.12sun-12.21sun

開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日：月曜日、10月14日〔火〕、11月4日〔火〕、11月25日〔火〕
*ただし10月13日〔月・祝〕、11月3日〔月・祝〕、11月24日〔月・休〕は開館

宇都宮美術館
Utsunomiya Museum of Art



「教会の長女」か、
「革命の娘」か、
それとも！。



キリスト教の神の威光に支えられたブルボン王朝に終わりを告げ、新たな時代を照らす光を人間の理性に見出したフランス革命。その理想は恐怖政治へと陥り、多くの犠牲を生んだ末、安定した社会の実現に至ることはありませんでした。ナポレオンの時代を経て王政が復活し、社会は一定の秩序を取り戻します。しかしながら、その後もひとつの問いがフランス社会に突きつけられ続けることになります。すなわち、フランスは「カトリック教会の長女」に戻るのでしょうか、あるいは「革命の娘」となるのでしょうか。社会を大きく二分するこの問いのもと、さまざまな思想や価値観が錯綜し、国家と宗教との関係性はマイノリティの宗教をも巻き込みながら大きく揺れ動いていきます。こうしたうねりの中で、美術もまたその姿を変化させていきます。絶対の指針が失われた時代に、何をどのように描けばよいのでしょうか。美術は何を映し出すのでしょうか。そして、美術を美術たらしめる「力」は、どこから生まれてくるのでしょうか。本展では、フランス革命から20世紀半ばへと至る時代に焦点を当て、優れた作品の数々を、それを生み出した信仰や社会の変化に沿ってご紹介します。民主主義社会の創設——すなわち人が人の力で社会を作り上げようと模索する時代に、人が作る物に宿る聖性の起源と行方を追いかけていきましょう。



1	2	3	4	5
6	7	8		
9	10	11		

1. アンドレア・アッピアニ 《ルーヴル宮殿でアテナ像の前に立つナポレオン》1814年頃 東京富士美術館 ©東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPartcom
2. モーリス・ユトリロ 《旗で飾られたモンマルトルのサクレ＝クール寺院》1919年 埼玉県立近代美術館
3. エティエンヌ・ディネ 《モスクからの帰り》1918年 国立西洋美術館 松方コレクション
4. ロドルフ・プレスダン 《善きサマリヤ人》1861年 三重県立美術館
5. ジャン＝フランソワ・ミレー 《無原罪の聖母》1858年 山梨県立美術館
6. ビエール・ビュヴィス・ド・シャヴァンヌ 《聖ジュヌヴィエーヴの幼少期》1875年頃 島根県立美術館
7. ウジェーヌ・グラッセ 《ポスター「ジャンヌ・ダルク」》(サラ・ベルナール主演) 1889/90年 宇都宮美術館
8. アレクサンドル・カバネル 《エステル女王》1882年 府中市美術館
9. オーギュスト・ロダン 《ユスタシュ・ド・サン＝ピエール司教(縮小像)》1960年 鋳造 ヤマザキマザック美術館
10. オディロン・ルドン 《—その右手に七つの星を持ち、口からは鋭いもう刃のつるぎが突き出ている。》(『ヨハネ黙示録』より) 1899年 三重県立美術館
11. アリ・シェフェール 《戦いの中、聖母の加護を願うギリシャの乙女たち》1826年 国立西洋美術館

観覧料	一般	大学生・高校生	中学校・小学生
当日券	1,200円	1,000円	800円
団体割引料金	960円	800円	640円

*団体割引料金は20名以上 *身体障がい者手帳、療育手帳、精神障がい者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者(1名)は無料。*宇都宮市在学または在住の高校生以下は無料。宮っ子の誓いカードまたは学生証をご提示ください。*11月3日〔月・祝〕「文化の日」は宇都宮市民は観覧無料です。ご来館の際は住所が確認できる身分証明書をご提示ください。*毎月第3日曜日(10月19日、11月16日、12月21日)は「家庭の日」です。高校生以下の方を含むご家族が来館された場合、企画展観覧料が一般・大学生は半額、高校生以下は無料となります。

主催：宇都宮美術館、下野新聞社 特別協力：町田市立国際版画美術館
助成：芸術文化振興基金(展覧会助成)

公益信託タカシマヤ文化基金(シンポジウム助成)
ポーラ美術振興財団(調査研究助成)

公益財団法人
ポーラ美術振興財団
POLA ART FOUNDATION



Laïcité et Art français: lumières de la foi et de la raison

ライシテからみるフランス美術

信仰の光と理性の光

2025.10.12sun-12.21sun

開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日：月曜日、10月14日〔火〕、11月4日〔火〕、11月25日〔火〕
*ただし10月13日〔月・祝〕、11月3日〔月・祝〕、11月24日〔月・休〕は開館



Événements & Activités

【関連イベント】

●**討論型鑑賞会「この絵、すごい？それとも、ひどい？」**
個性豊かな近代美術が生まれるためには、作品についての自由な議論と評価が行えることがとても重要でした。作品をほめる人にもけなす人にも、作品の特徴を見抜く眼力と他人の感性に思いをはせる想像力、皆の気持ちを動かす言葉の力が求められます。「作品応援チーム」と「作品批判チーム」に分かれて、美術批評に挑戦しましょう。

日時：11月2日〔日〕 ①午前10時～11時30分 ②午後3時～4時30分
会場：宇都宮美術館展示室2・3
定員：各回10名（事前申込制）
ファシリテーター：請田義人氏（倉敷芸術科学大学講師）、および本展担当学芸員

申込期間：10月1日〔水〕午前10時～10月24日〔金〕午後5時
申込方法：オンラインの専用申込フォームに記入いただくか、ハガキに参加希望の時間帯および氏名（複数参加の場合は全員）・住所・電話番号・参加人数を記入し、下記の宛先までお申込みください。定員を超えた場合は抽選。当落に関わらず、結果は美術館からご連絡申し上げます。

〒320-0004 栃木県宇都宮市長岡町1077番地
「宇都宮美術館 ライシテ展討論型鑑賞会係」

申し込み専用フォーム



●シンポジウム「ライシテからみる美術、美術史、美術館」

本展は、近代美術や美術館の仕組みが出来るまでの前史をたどるものでもあります。そこには宗教と美術との連続性／断絶性が垣間見られ、それは今日の美術館活動にも関係しているかもしれません。さまざまな分野の専門家にお話を聞いてみましょう。

登壇者：
金沢百枝氏（多摩美術大学教授）
君島彩子氏（和光大学講師）
鈴木麻里子氏（三重県立美術館学芸員、本展共同企画者）
伊達聖伸氏（東京大学大学院教授、本展学術協力者）
藤原貞朗氏（茨城大学教授）
および本展担当学芸員

日時：11月23日〔日・祝〕午後1時～5時30分（開場は12時30分）
会場：宇都宮美術館講義室
定員：150名（事前申込不要、当日先着順）*企画展チケットをお求めください。

●担当学芸員によるギャラリートーク

日時：10月19日〔日〕、10月26日〔日〕、11月15日〔土〕、11月29日〔土〕
各回午後2時～
*企画展チケットをお求めのうえ、中央ホールにお集まりください。

【栃木県立美術館のご案内】
宮城県美術館コレクション 絵本のひみつ展
2025年10月25日〔土〕～12月21日〔日〕
*詳細は栃木県立美術館へお問い合わせください。TEL. 028-621-3566

●「ライシテ展」宇都宮会場の最新情報やみどころ、出品作品紹介はこちらをご覧ください。

「ライシテ展」宇都宮会場公式X



【交通のご案内】
●JR東京駅から東北新幹線「JR宇都宮駅」下車（約50分）
●JR宇都宮駅西口5番バス乗り場から関東バス「豊郷台・帝京大学」經由宇都宮美術館」行き終点下車（約25分）
●東北自動車道「宇都宮インターチェンジ」から約10km、「鹿沼インターチェンジ」から約14km
●北関東自動車道「宇都宮上三川インターチェンジ」から約19km



〒320-0004 栃木県宇都宮市長岡町1077番
Tel. 028-643-0100
HP: <http://u-moa.jp> X, Instagram: @utsunomiya_moa

ライシテとは何か

フランス美術を読み解くためのキーワード

ライシテとはフランス共和国の特徴的な政教分離のあり方を指す言葉である。今日のライシテを基礎づけている政教分離法は、第1条で良心の自由と礼拝の自由について述べ、第2条で政教の分離と共和国の宗教的な中立を規定する。このことが示唆するように、ライシテは宗教性排除の原理として表れることもあれば、諸宗教共存の理念として働くこともある、重層的な概念である。本展ではライシテの歴史の始まりを**フランス革命**の時代に見出し、ライシテをめぐる社会の変遷の歴史に沿って美術のあり方を紹介していく。

フランス革命

1789年に始まる**フランス革命**は、ブルボン王朝を打倒し、社会のあり方を大きく変えた。王政を支えていたカトリック教会は、フランス王国に生きる人々の日常生活を支え、管理し、その文化的・社会的な統合を担っていたが、革命はそれを徹底的に破壊した。革命後にナポレオンと教皇庁が結んだコンコルダートによりカトリックは「フランス国民の大多数の宗教」として復権することになるが、それは19世紀を通じての「**二つのフランス**」の争いへとつながっていく。

革命の娘としてのフランスを象徴するものとして、「**マリアンヌ**」と呼ばれる女性像が登場し、演劇、カリカチュール、モニュメント、絵画等、様々なメディアで表象される。発注者や描き手の意図、するところにより、戦士、庶民の娘、恐ろしい怪物のような女性など、多様な姿で描かれたが、慈愛に満ちた母として描かれた際には、さながら世俗の**聖母マリア**とも呼べるような姿であった。

聖母マリア

19、20世紀は聖俗化と近代化の進んだ時代である一方、**聖母マリア信仰**隆盛の時代でもあった。フランスを中心に世界各地で聖母が出現し、神の母である彼女が果たして神性を持つか否かが議論された。国民全体を巻き込む大きな戦乱に見舞われたこの時代、フランス第一の守護聖人であるマリアが人々の大きな心の支えとなったことは疑いないが、フランスにおける**マイノリティの宗教**を信じる人々も戦争に巻き込まれていたことも見逃せない。

民主主義社会の成立

かつて、神や王がその権威によって社会を形作り、動かしていた時代、美術はその威光を称える役目を担っていた。本展の舞台となる19、20世紀のフランスは、ライシテの変遷とともに**民主主義社会が成立**していく場であった。人が人の生きる社会を人の手で形作っていくとき、**美術**はどのようなものになっていくのだろうか。

マイノリティの宗教

フランスでは伝統的にカトリックの信徒が多数であったが、**プロテスタント**、**ユダヤ教**、**イスラーム教**等を信じる人々もいた。フランスのライシテは、彼ら彼女らにも同等の良心の自由を認めるはずのものであり、宗教の違いを越えて差別なく社会に参加する権利が皆に与えられてこそ、**民主主義社会**は実現しえる。

【上段】ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ《愛国（習作）》1893年頃 公益財団法人大原芸術財団 大原美術館
【中段】マルク・シャガール《静物》1911-12年 宇都宮美術館
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2025 G3936
【下段左】ギュスターヴ・クールベ《会議からの帰り》（「ほろ酔いの司祭たち」より）1868年 個人蔵
【下段右】ルネ・マグリット《大家族》1963年 宇都宮美術館